

# 新任教員・昇任教員紹介

## 新任教員

平成30年1月1日付



歯学部 教授  
(生体機能・病態学系(組織再建口腔外科学))  
**志茂 剛**(しもつよし)

広島大学歯学部卒業、岡山大学大学院歯学研究科博士課程修了。吉備高原医療リハビリテーションセンター歯科歯科医師、ペンシルバニア大学歯学部 ポストドクトラルフェロー、岡山大学歯学部附属病院第二口腔外科医員、同准教授を経て、本学就任。歯学博士。

## 昇任教員

平成30年2月1日付



心理科学部 教授  
(臨床心理学科/司法犯罪心理学)  
**野田 昌道**(のだまさみち)

東京大学教育学部教育行政学科卒業、神戸家庭裁判所家庭裁判所調査官、東京家庭裁判所家庭裁判所調査官、神戸家庭裁判所姫路支部主任家庭裁判所調査官、横浜家庭裁判所川崎支部主任家庭裁判所調査官、本学心理科学部臨床心理学助教を経て、教授昇任。

平成30年2月1日付



歯学部 准教授  
(口腔構造・機能教育学系(保健衛生学))  
**松岡 紘史**(まつおか ひろふみ)

新潟大学人文学部卒業、本学大学院看護福祉学研究科臨床福祉・心理学専攻修士課程修了、同大学院心理学研究科臨床心理学専攻博士後期課程修了。北海道医療大学病院医療心理室常勤職員、同歯学部口腔構造・機能教育学系保健衛生学分野講師を経て、准教授昇任。

## Message

## 定年退職される先生からのメッセージ



薬学部 教授  
**和田 啓爾**

本年3月、定年を迎えることとなりました。1982年4月、私は薬学部衛生化学教室に助手として着任してから36年間、本学一筋に過ごしました。当時は薬学部と設置間もない歯学部のみでした。大学駅はなく、大学、当別駅間をスクールバスが往復していました。列車の便数も少なく、始業時間は9時半でしたが、土曜日が休日ではなかったので授業時間は十分確保されていました。

当初、学生と年齢が近かったのが兄弟のような感覚でした。当時は4年制で学生生活も今ほどカリキュラムがきつくなかったため、研究室総出で夏はキャンプ、冬はスキー旅行と、なつかしい思い出が脳裏に焼き付いています。年を重ねるごとに、講義や学部運営にもかかわるようになり、さすがに兄

弟感覚で学生と相対することもできず、次第にうんちくを披露することに。本学のいいところは、学生と教員の距離が近いこと、いろいろな意見があっても、いざ行動するときは一体感を持って臨むこと。地域性は必ずしもいいとは言えませんが、純粋な教育研究生活のできる環境だと実感しております。

36年間勤め続けられたのは、自分のような人間を受け入れてくれる懐の広い大学だからだと思っております。今、大学は厳しい社会環境に置かれています。将来を見据え、今後の動向を鋭く察知し、機敏な行動力で大学の発展に向け、日夜進んでいくことが必要と思います。本学そして係る教職員や学生の皆さんの益々のご発展を祈念し、定年のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



薬学部 教授  
**平藤 雅彦**

1993年4月に本学に着任以来25年が経ち、この3月で定年退職を迎えた。東北大学薬学部を卒業し、それまでは同歯学部の助手として、研究が主な自由な教員生活を送っていたが、当時の恩師だった先生を通じて南勝前教授より本学へのお話があり着任した。それまで北海道は一度も訪れたことがなく、面接の時、北大近くのホテルから南先生の運転するRV車で本学まで案内していただいた時の景色は今でもよく覚えている。

本学には助教として着任したが、早速待っていたのが講義と多くの学生、大学院生たちとの教育研究であった。それまで講義は担当しておらず、学生時代に受けたかつての授業を思い出しながら、板書と教科書を使って自己満足的な講義をしていた。しかしある時、学生によ

る授業アンケートに「この授業はひどい」と書かれているのを見てショックを受け、それからは講義資料作りやプレゼンソフトを使うなど、周りの先生方の講義も参考に工夫していった。それまではほぼ一人で進んでいた研究も、ここでは指導する立場となり最初は戸惑ったが、熱心な多くの大学院生や先生方の協力を得ながら進めて来ることができた。

本学での25年を振り返ると、空間的にも、時間的にも、そして人生的にも、「思えば遠くに来たもんだ」と言う気がする。研究成果や来し方に忸怩たる思いもあり、今後の薬学の行く末も杞憂している。しかし、これまで多くの学生を薬剤師として社会に送り出すお手伝いができたことは誇りに思っている。本学部卒業生が益々活躍することを祈念するとともに、お世話になった本学の諸先生に感謝申し上げます。



薬学部 教授  
**八木 直美**

私が本学に赴任したのは39年前、高田昌彦先生(現 名誉教授)がいらした薬理学教室でした。当時、4年生(2期生)が12人教室に配属されました。年齢が近かったこともあってか、皆さんの人となつこに大変驚きました。年齢で慣れるのに時間はかかりませんでした。当初の仕事は、4年生男子と保健所から数匹の雑種犬を預けて来て、当時は固定台や機器も揃っていませんでしたので、4年生が犬を押さえて高田先生が薬物投与後の採血をされ、その血中薬物濃度の測定をしたのを今でも鮮明に覚えています。当時の学生さんたちは、すでにお孫さんくらいしゃる年齢です。あれから40年近く経ちますが、学生さんたちに囲まれて仕

事しておりますと、自分もどうの昔にそういう歳になっていることを、ついつい忘れてしまいます。それくらい、毎日たくさんのエネルギーをもらっていたのだと痛感しております。薬理学から製剤学、そして現在の薬事法制分野に異動となり、時代とともに学生さんの気質も環境も変わりましたが、共に悲しみ、怒り、悩み、そして喜んだことは今も昔も変わっていません。

本学の職員の皆様、卒業生並びに在学生の皆さんに支えられ、無事にこの時を迎えることができましたことを深く感謝申し上げます。どうか昔ながらの医療の良さを残しながら、新しい風を吹かせていかれますことを心よりお祈り申し上げます。

### 「感謝と思い出」



歯学部 教授  
**中澤 太**

朝、目が覚める度に「早く大学に行きたい」と、身支度もそこそこ出勤した毎日。その繰り返しで、本学歯学部で過ごした私の13年6か月だった。どんな些細なことでも全身全霊・猪突猛進に取り組み、研究と教育の充実した日々を過ごすことができたのは、私を支えてくれた多くの先生方や職員の方々の御協力、そして家族の寛容さによるものだと、心から感謝している。

特に思い出深いのは、SCRIP活動に取り組んだ学生諸君との出会いである。ファカルティアドバイザーとして5回、SCRIP日本代表選抜大会に参加したが、何れの学生も熱心に研究に取り組み、全ての大会で上位入賞(優勝1回、準優勝2回、第3位2回)を果たしてくれた。さらに、入賞後に米国の各地で行われた世界大会に参加し、本学の学生が世界各国からの学生と親密に交流する素晴らしい姿を沢山見せてもらった。これらの学生諸君に出会い、多くの感動を共有できたことに深く感謝している。

また、大学院生としては最も難関である日本学術振興会育志賞を、研究指導してきた本分野の大学院生が受賞した(私立大学としては3校目、歯学分野では初めて)ことも強く記憶に残っている。天皇皇后両陛下御臨席で行われた授賞式では、初めて日本学士院に入る経験もできた。

さらに、これまで私が交流してきた海外研究者との絆を基に、Indonesia Univ.、Mahidol Univ.、State Univ. of New York at Buffaloの3校との学部間姉妹校提携に貢献できたことも嬉しい思い出である。

このような、学部学生や大学院生の研究指導、国際交流活動が評価され、理事長賞を3回受賞したことは、本学における私の教員生活の中で、最大の誉であり、今後も全身全霊・猪突猛進に次の人生に取り組む覚悟で居る。



看護福祉学部 教授  
小林 正伸

「医療大学での10年間に感謝」

北大遺伝子病制御研究所から移って10年間、看護福祉学部の教員として楽しく過ごすことができました。毎年ゼミ生5人と楽しく飲み会をしたり、国家試験対策の勉強会を行ったりしましたが、うれしいことに卒業後もFacebookなどを通してつながり続ける卒業生たちがたくさんいます。沖縄に旅行すれば一緒にご飯を食べたり、飲みに付き合ってくれる教え子がいいます。大阪にも東京にもたくさんのお教え子たちがいます。一昨年、大腸がんのおべのために札幌厚生病院に入院しましたが、教え子たちがたくさん病棟看護師をしており、彼女たちの成長ぶりに一安心したことを思い出します。すごい財産と思って感謝しています。北海道医療大学に移つ

て10年間、医学部の新設をめざして活動したり、歯科内科クリニックで外来診療をしたり、保健管理センターの医務室で健康管理業務に携わったり、大学病院の診療など多彩な業務に携わることができ、飽きる暇はありませんでした。大学への通勤時間も、教科書の執筆時間として有効に使うことができ、教科書を2冊、一般向けのがんの本を1冊出版することもできました。北大にそのままいたならばできなかったことだろうと思うと、こちらに移れたことは私の人生にとって様々な彩りを与えてくれた、なんてラッキーな出来事だったんだらうと、深く深く感謝しております。本当に長い間ありがとうございました。



看護福祉学部 教授  
Howard  
N. Tarnoff

「Retirement Article」

I first came to Japan at the end of March 1976 to work as an English teacher in Tokyo. The popularity of Japan had not yet even started and amazingly on the streets of Ginza when I met another foreigner walking along the street it was such a rare event that we would wave, say hello, or even stop to chat. I loved Tokyo with all my heart and I was so shocked by how big it was even as compared to my hometown of NYC. My stay was only 6 months at that time and then I returned back to the US for Graduate Studies. I returned to Japan once more to another face of Japan which was the Hokuriku area in the very traditional and picturesque city of Kanazawa some 2 years later. It was the exact image of old Japan that many foreigners have of the land of samurai and geisha and it was a precious learning experience about cultural Japan on a daily basis. I was a foreign graduate student under the Ministry of Education at first and I studied under the guidance of the Department of Public Health in the School of Medicine, Kanazawa University. I then became a foreign instructor teaching English in many faculties of Kanazawa University which was ideally located right on the exact grounds of Kanazawa castle. I walked to work daily to my class in the castle. After 5 years in Kanazawa as both a graduate research student and then as a teacher I wanted to have yet another experience in another part of Japan. Everyone I talked to in Kanazawa and also in Tokyo recommended that I head for the much loved city Sapporo on the island of Hokkaido. It was a much bigger city than Kanazawa with a larger foreign population. I was fortunate to land a job at Sapporo Medical College where I worked as a foreign language teacher. Hokkaido culture was again so different than either Tokyo or Kanazawa. People were truly more open minded and frank and it was like a blend of Japan and North America. After Sapporo Medical College, I was fortunate to be recruited by 2 very different universities at both ends of Japan, Miyazaki Medical University in Kyushu and Higashi Nippon University here in Hokkaido. I was still young and unafraid of winter so I wanted to remain with the friendly folks of Hokkaido. In seemed like fate that Higashi Nippon University was located in an area of Tobetsu called Kanazawa. I was back to Kanazawa!

Higashi Nippon University was a rather compact and a very intimate university in 1988 when I first arrived with just 2 departments at that time; Pharmacy and Dentistry. I taught English to both faculties. The

students were mature in age, especially in the School of Dentistry. There were surprisingly many students from Okinawa which made for an interesting mix of student backgrounds. Higashi Nippon University grew as the years passed and new faculties joined every few years making the university extend itself in many ways. The name changed to Health Sciences University of Hokkaido and I still continued teaching in almost every faculty established so I got to know and understand many types of students. I was placed in the Faculty of Nursing and Social Services which was an ideal match for me.

I was busy with teaching but also advised the English Speaking Club (ESS) and at first and for quite a few years after we had many students and interestingly, also quite a few faculty members who attended meetings and parties making for a quite unique ESS club.

I wanted to help internationalize HSUH and so in 1992 a small delegation went to take a look at the University of Alberta in Canada. It was love at first sight for me and the others. The university was huge and beautiful with amazing architecture. Prof. John Bachynsky and Prof. Len Wiebe from the University of Alberta faculty of Pharmaceutical Sciences were instrumental in bringing our two universities together in such a dynamic and friendly way. Director of the UA English program, Ms. Mimi Hui pioneered our Summer Language & Culture Program for the entire time. It has been a joy to work with these three key individuals from the University of Alberta for all these years. I have made many great faculty contacts in the many years of going to Edmonton. I have had the great pleasure of bringing hundreds of HSUH students from every faculty for this experience that includes language classes, academic tours, and exciting social activities coupled with a home stay for the last 25 years. I am hoping for this special relationship to continue on just as passionately even when I retire.

My great thanks to so many people at HSUH as well as the students. I feel the students, faculty, administrators, administrative staff, cleaning staff and guards of HSUH have a kind hearted personality that spreads to all corners of the university. I am fortunate to have seen our university grow so nicely over these 30 years. Thank you from the bottom of my heart.



リハビリテーション科学部 教授  
岩瀬 義昭

本年度で定年退職する前期高齢者の仲間入りいたしましたこともあり、誌面を借りてメッセージいたします。札幌に在住する両親の介護のため2年ほど南北を往復しておりましたが、体力的に無理ができなくなったこともあり前職(鹿児島大学医学部保健学科と大学院保健学研究科を兼務)を早期退職し、2016年4月に南の地からUターンしてまいりました。本学に厚労省の医道審議会と同席した縁で知り合った上野前教授が在籍しておられた事もあり、リハビリテーション科学部作業療学科の完成年度に赴任しました。前職において作業療法士養成課程で基礎作業学の講義、他学科との横断的なリハビリテーション科目、身体障害領域の作業療法等を教授していた事や大学院博士前期および

後期課程で研究指導に従事していた経験を生かして当大学の業務に就いております。ところで、国は今年度末に理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則が改訂される方向で動いております。その内容は、1.国家試験受験のために修得すべき総単位数の増、2.臨床実習単位数の増とその内容の見直し、3.専任教員要件の見直しと員数増とされていますので、当大学においても対応が求められると推測します。医道審議会に所属していた時に、国家試験結果の是非判断や理学療法士・作業療法士の倫理問題への対処だけでなく、療法士養成課程の審議等を行っていた経験がありますので、今後改訂規則への対応にも努力したいと思います。



薬学部 教授  
大倉 一枝



看護福祉学部 講師  
高橋 久江



予防医療科学センター 教授  
辻 昌宏

以上の諸先生の他、薬学部 大倉 一枝 教授、看護福祉学部 高橋 久江 講師、予防医療科学センター 辻 昌宏 教授が定年退職されます。ありがとうございました。

With heartfelt thanks.

